ヤマガタで世界を見る

竹林紀雄

定義しないドキュメンタリー

国際的に評価が高く、これまで王兵や河瀬直美などの映画作家を輩出してきた「山形国際ドキュメンタリー映画祭」が七日から十四日まで開催される。隔年開催で毎回、山形市で開かれているが、十七回目の今回はコロナ禍の影響でオンラインでの開催。コンペティションの二部門には合計で百二十四カ国・地域から二千作品近い応募があり、選ばれた三十三作品が決まった日時に配信される。監督など製作者との質疑応答もライブ配信される。

私は二〇〇七年の第十回以来、同映画祭に通い続け、数多くの名作と出合ってきた。最も感銘を受けたのがヴァディム・イェンドレイコ監督の「5頭の象と生きる女」。ロシアの作家ドストエフスキーの長編五作を「5頭の象」と呼び、生涯をかけてドイツ語に訳した翻訳家スヴェトラーナ・ガイヤー。第二次世界大戦に翻弄され、数奇な運命をたどった彼女の記憶のひだを丁寧に描いた作品である。

ジョシュア・オッペンハイマー監督の「殺人という行為」も印象に深い。一九六〇年代にインドネシアで政変に伴って起きた百万人規模の大虐殺。その殺りく現場で実際に手を下した殺人者に、その行為を一つ一つ再現させることで、その現実に迫る異形の作品だ。

それぞれ一一年と一三年のインターナショナル部門で優秀賞と最優秀賞に選ばれ、後に「ドストエフスキーと愛に生きる」と「アクト・オブ・キリング」の題名で劇場公開された。

前回の同映画祭で私が日本映画監督協会賞の審査員を務めた際には、贈賞したアラシュ・エスハギ監督の「気高く、我が道を」などイラン映画の水準の高さを再認識した。

テレビに軸足を置いてきた私が同映画祭に注目してきたのはなぜか。ここにはドキュメンタリーを定義しない自由さと映像そのものの面白さがある。そしてそれは、日本のテレビドキュメンタリーへの大きな示唆でもあるからだ。

世界との違いで最たるものがナレーションに頼りすぎる映像表現だ。フランスの批評家ロラン・バルトが「映像の修辞学」の中で用いた「投錨」という概念を援用するならば、最小単位のカットでさえ冗舌すぎる情報を含有する映像と、それを文字によって一つの方向に固定化しようとするナレーションは異質のものである。

ナレーション過多の日本

例えば、取材対象者を撮影した映像からは、語る言葉、表情から人物の心模様や人品骨柄を認識することができる。さらには、人物の背景など作る側が意図せずに映り込んだものにもさまざまな情報があるはずだ。そして、そこから何を受け取るかは見る側の自由である。本来、多義的な映像をナレーションで一義的にすることで、ドキュメンタリーの物語は飛躍的に紡ぎやすく、そして分かりやすくなるが、本来、映像が持つ現場のリアリティーやダイナミズムは減衰するのである。

ただし、フジテレビ系列二十八局による昨年のFNSドキュメンタリー大賞では、ナレーションが無い「テレビで会えない芸人」（鹿児島テレビ）に大賞が贈られるなど日本にも進化の兆しがある。

さて、今回の同映画祭である。前回に続いて上映作品に選ばれた九十一歳の巨匠フレデリック・ワイズマン監督の「ボストン市庁舎」は、彼の生まれ故郷の市役所職員の地道な活動にカメラを向けた。「理大囲城」は香港の民主化運動が激化した一九年十一月の撮影。警察に包囲された理工大学に籠城した若者たちの姿を匿名の監督たちが克明に捉えた。それ以外にも見どころの多い国際基準のドキュメンタリーが勢ぞろいしている。

（たけばやし・のりお＝映像作家、文教大大学院教授）

香港の民主化運動が激化した2019年11月に理工大学で撮影された映画「理大囲城」より ▼

波小波大

深沢潮の『翡翠色の海へうたう』（KADOKAWA）

は、沖縄の従軍慰安婦を描いた長編小説である。朝鮮半島から騙して連れてこられた女性が日本軍兵士の性欲のはけ口にされる日常を描く章と、彼女たちを小説に書くため取材する現代の女性を描く章が交互にあらわれる。

「わたしは、ただただ、穴、に、される」という慰安婦の日々はあまりにも過酷だ。あらゆる尊厳を奪われたうえ、沖縄戦の地獄に突き落とされる。たとえ教科書から「従軍慰安婦」「強制連行」の文字が消えても、あったことをなかったことにはできない。

この小説でもうひとつ重要なのは、当事者でない者が歴史の悲劇を題材に小説を書くことをめぐる自己言及的な問いである。

現代の章の主人公は作家志望。彼にとって歴史は題材であり、作家になるための手段である。そのことを主人公は取材中に突きつけられる。「なんのゆかりもないひとが、事実に即しているとはいえ、沖縄での戦争を、小説という虚構に都合よく作り変えてしまうことに、抵抗があるんです」という言葉は重い。

従軍慰安婦や沖縄戦に限らない。他人の不幸を商品化し、金と名誉を得ようなんて―。そう誹られても書く覚悟はあるか？（何様）

2021.10.6

炎上考

吉良智子

18

プリキュア

性別の制約を打ち破る

十月十一日は国際ガールズ・デー。「女の子だから」と教育を受けさせないなど、少女への性別や年齢による差別や社会的制約をなくそうと、国連が制定した記念日だ。そう聞くと「途上国の話」だと思いがちだが、そうだろうか。

二〇〇四年に放送が始まったアニメ「ふたりはプリキュア」は、「女の子だから」という制約を打ち破った画期的な作品だ。コンセプトは「女の子だって暴れたい！」。普通の女子中学生が「プリキュア」に変身し、協力しながらキックやパンチで敵と戦う。男性のプロデューサーは、幼いころに女の子とも変身ごっこで遊んだという。その経験から「子どもに男女差はない」「『女の子だからおしとやかにしなさい』と無理強いするのは違う」（『アニメージュ』二〇一八年七月号掲載の対談）と語る。

性別で制約をしない気遣いはキャラクターデザインにも及ぶ。たとえばアクション場面があるので、靴はパンプスではなくブーツだ。一方、変身後のコスチュームはへそ出しやミニスカートなど、露出のあるファッショナブルないでたちである。しかしスカートが短い時はスパッツをはかせるなどして、下着を見せない工夫をしている。胸が不自然に揺れるシーンもない。

©東映アニメーション ＊プリキュアシリーズ最新作「トロピカル～ジュ！プリキュア」はABC日系列にて毎週日曜朝8時30分から放送中

つまりプリキュアは性的視線から意図的に遠ざけられている。主な視聴者層は未就学の女児。キャラクターは自分より年上のロールモデルだ。もしそのキャラが性的に消費されてしまったら、保護者はもとより、これから羽ばたこうとする女の子の翼を折ってしまうからだろう。

現在の女子大学生は、ちょうど初代プリキュアを見た世代だ。私が授業でコンセプトを紹介すると、「当時プリキュアを見て、強くてかっこいい女性になりたいと思った」「アニメを通して固定概念がなくなるのは良いこと。自分もそうした流れに参画していきたい」という感想が出てくる。戦隊ヒーローものの「ごっこ遊び」では、ピンク役（一人だけしかいない女性キャラ）をやるしかなかったが、「プリキュア以降は好みのキャラが選べるようになった」という学生もいる。プリキュアのメッセージが若者に確実に伝わっていることが、とても頼もしい。（きら・ともこ＝美術史・ジェンダー史研究者）

＊次回は20日に掲載予定

文化